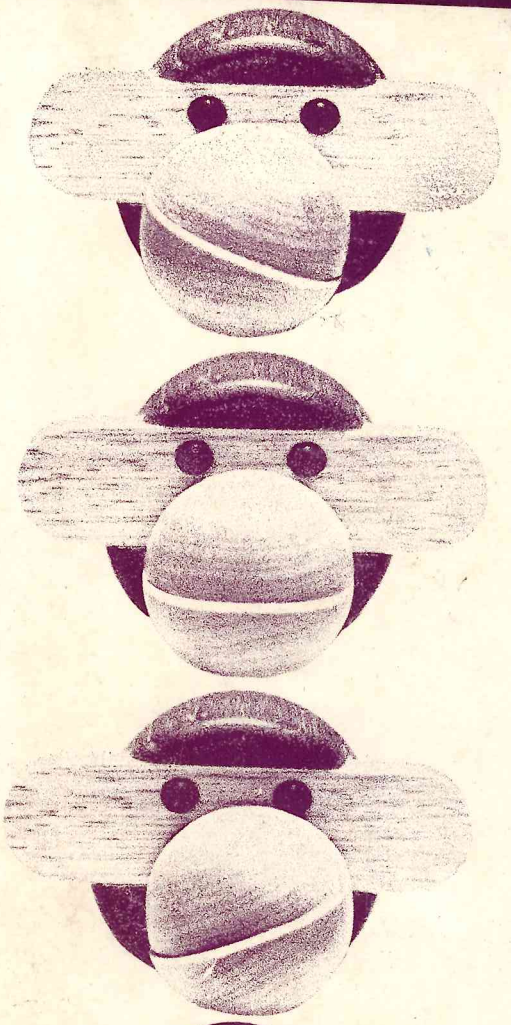
紫珠

1

1968

紫珠発行所

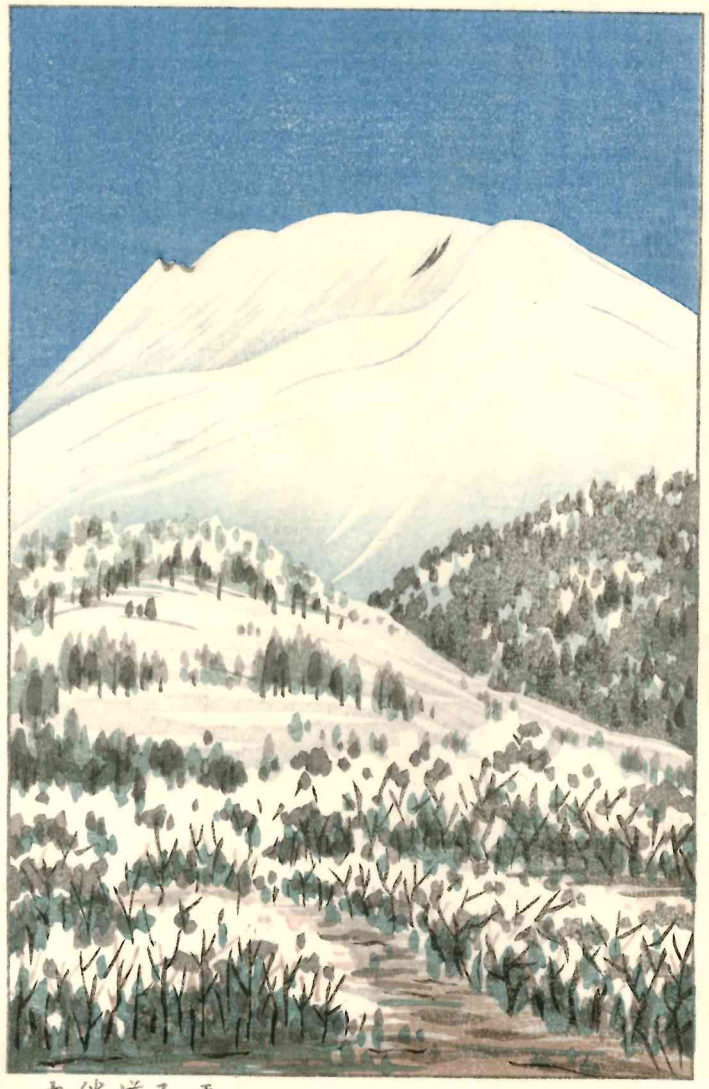
昭和三十七年 五月二十八日 第三種郵便物認可
昭和四十三年 一月一日印刷 一月五日発行
第八巻 第一号 毎月一回 五日発行



あけましておめでとうございます

今春4月 西武渋谷店が開店いたします ご期待ください

池袋・木曜定休
電話東京(981)0111大代表 SEIBU西武



萬 宇 回 春

第 8 巻　第 1 号

目　　次

巻 頭 言（版画）……（3）
同人　Ⅰ……（4）
大伴道子　苑翠子　中川環　宮師雙美　朝倉綾子　横山憲一郎　木村賢一郎
山茶花……中市　弘（9）
この道……田中克巳（10）
孤独について……星野慎一（12）
年のはじめに……大伴道子（14）
過ぎし年をおもひて……中川　環（16）
若 葉 集……（18）
村瀬つね子　小山摂子　田中とみえ　泉鏡子　吉田とよ　稲垣和枝　平畠芳枝　古谷まゆみ　井上イツ　室岡まさ　不二麻妙　鈴木紀美　服部はつ　武田みき　栗原義子　斎藤松子　末松生子　柴田嘉寿江
或日の日記より……大伴道子（23）
早蕨集合評……（24）
同人　Ⅱ……（28）
辻林美代子　工藤浩子　山本百合花　新田ミツ　阿部陽子　川村玲子　浅井初江　小原浪子　塩井ひさ　山年子　守口忠夫　南谷恵太　尾崎文英
新年名刺交換……（36）
十二月歌会記……（40）
編集後記……（41）

表紙岡村夫二・カット口絵（版画）大伴道子

この道

田中克巳

「この道やゆく人なしに秋の暮」と芭蕉がうたったのは何歳の時だったらう。生まれたのが正保元年（一六四四）で元禄七年（一六九四）「旅に病んでゆめは枯野をかけまはる」の句をつくって死んだといふから、調べても見ないが、芭蕉はわたしよりずっと若くて死んだのである。このごろ新聞で見て、わたしより若い人が死ぬ（有名になって）のををかしく思ふやうになったが、考へて見ればわたしも老いたのである。

としよりの証拠は、これも亡くなられたわたしの元の上司（滋賀県立短期大学長、動物学者）川村多美二博士から、通勤の汽車の中で教はった。老人の特徴は三つあって、一つはおしゃべり（とりわけ思ひ出を）、二つはくりごと（同じことを何度もいふのである）、三つめはど忘れ（たとへば人名地名を忘れるのである。御紹介いたします、こちらは××会社の××係長といふとき、さっき名刺をもらったばかりの係長の名を忘れて、も一度、名刺をとり出さなければならないのである

が、わたしもおしゃべりの年代に来てゐる。くりごとになるかもしれないと記憶をはぐってみたが、少くとも「紫珠」の皆さまには申し上げたおぼえがないので、好い機会に書いてみよう。

芭蕉の「この道」はもとより秋の暮のさびしさを歌ったもので、裏街道でも王昌齢「出塞行」の「秋天曠野行人絶」や耽誨「秋日」の「古道少人行」などと同じ趣、といふよりは芭蕉の唐詩愛好の結果、口をついて出たものであらう。

しかしわたしは違う意味の「この道」を歌った。それは

この道を泣きつつわれの行きしことわが忘れなば誰か知るらん

といふ歌で、わたしの処女詩集「西康省」（昭和十三年刊行）の冒頭に収めたところ、岡本かの子史から「この詩集でここだけ同感しました」と喜んでいいのか、悲しんでいいのかわからない評語を、出版記念会の席上で賜はった。この会は十一月十三日丸ノ内の「マーブル」という喫茶店で開かれ、佐藤春夫先生、宇野浩一先生などありがたい方方の御出席をいただいたが、中でも岡本かの子先生はこの会の直後なくなられるので、とりわけ身に沁みて聞き、三十年たった今だに忘れられないのである。

も一人ほめてくれたのは太宰治で、詩集を贈ったあと何もいって来ないので、三鷹の家へ訪問すると、机の上には画集が一冊おいてあるだけで、あとは見廻しても何もない。「きみの詩集はこの間までここにあった。あの歌はいいな」

といってそらでいってくれた。もうなくなってゐるわけは聞かなかったが、他人にやったのかと思ってゐる中、「出よう」といってどこからか二三冊の本を出して来て、ふところに入れ、出るとすぐ自分の家の垣根に向って小便した。わたしはびっくりしてみてゐた。「垣根にやるつもりなら家でする。よその垣根ならともかく、自分の家のに」、といふのがわたしの理論だったやうに思ふ（自らを表はし出して今から思へばわたしの負けである）。

この歌を太宰が愛好した証拠はふしぎな機会にわたしは得た。太平洋戦争に徴用されてシンガポールへゆく洋上、仲良くなった印刷をやる青年が「田中さん、わたしの好きな歌があって、太宰治から教はった」といひ「この道を」と暗誦してくれた。「それはわたし

の作だ」とわたしが喜んでいふと、この人はすぐ信用してくれ、その後わたしと一番の仲良しになった。これも昭和十七年のことだから、今から二十五年まへのことである。

さてこれは何年まへだったか、大伴さんの会があって短冊が出されると、某友が自分のことを書かずにまたこの歌を墨くろぐろと書いた。大伴さんのそのあとのおたよりでは、岡本さんと同じく好いていただいた由である。

話ついでに、この歌の出来た前後のことを書いてみよう。初めにいったやうに、わたしは年のせいで思ひ出ばなしがしたいのである。第一にこの歌は処女詩集「西康省」の出た昭和十三年の作ではなくて、昭和五年、わたしが高等学校三年の秋の作である。この年にはわたしは今の勘定では十九歳であるから、この歌はたしかに少年感傷の作にちがいない。しかしその感傷が常識とはちょっとちがふ方角に向いてゐたことだけはいっておきたい。といふのは、この昭和五年といふ年は、翌年はじまる満州事変――それにつづく十五年の戦争が予感されてゐた年である。少年敏感といふより、「資本論」をよみ、ブハーリン（当時プラダウの主筆）をよみ、帝国主義はまづ相互間の戦ひをひき起し、その結果、被支配階級の革命をうながすといふ理論の、少くとも前半だけがいまにも実証されようとしてゐるのを、わたしのまはりにゐる勉強家たちは、怠けもののわたしにも教へてくれたからである。

わたしは八代集をよみ、万葉集をよみ、茂吉と「即興詩人」をよんだだけで、保田与重郎から「竜之介をよんでゐないのか」と嘲笑され、まづこれを片づけて、インテリの無力をつくづく思ひしらされた。この無力感としかもいらない知識ほど人をいらだたすものはない。わたしはつとめて学校を休み、歩きまはった。業平が高安に住む恋人のもとへ通ったといふ、竜田道を歩いて、法隆寺までいったのも、そのせいである。山畑で働いてゐる人が見えるばかりで、歩く人のないみちを、わたしは芭蕉の句を思い出しながら、季節感よりもむしろ末世感にひかれてゐた。ものみなの亡ぶのが近いと大げさに感じてゐたのである。

さうして帰宅してから出来たのが、まへにあげた歌である。かの子女史や太宰がどういふとらへかたをしたかは、わたしにはわからない。昭和十三年ごろには、日本の侵略はいよいよ中国本土にまで及んでゐたのである。

しかもこのころになるともう日本人の敗北感や危機感はなくなりかけてゐたのではなかったらうか。も一度この二人のひとを呼び起して感想をきいてみたい気がする。

わたしは今ごろになってこの歌を作りなほしたくなってゐる。長い旅路でわたしの孤独感はいよいよ強くなったが、それは人間に対する孤独感で、わたしはいつもわたしのよこにゐてはげますかたのあるのを、この年になっていよいよ深く信じるやうになったからである。しかしうろおぼえの西洋人のことばでは誰か知るらん」といふ反語、もしくは「誰も知らない」といふ句は「神ぞ知る」といふことばであらはすさうである。さうとすれば、わたしのひとりでといひながら（ボヤクとわたしのくにではいふ）歩いた道は、神さまがすべてご存じである。かう考へてわたしはこの歌を改作しないことにした。かの子さんや太宰などとは、いづれ会ったときゆっくり話しあふつもりである。

孤独について

星野慎一

ヘルマンヘッセに「霧のなかで」という一つの詩がある。

霧のなかを歩くのは　不思議なことだ
どの藪も　どの石も　ひとりぼっちで
どの木も　ほかの木が見えない
みんな　ひとりぼっちなのだ

まだ、私の生活が明るかったときには
この世も　友だちにあふれていた
ところが　霧にとじこめられたら
もう一人も　見えなくなってしまった

しずかに　しかも　のがれられないように
自分を　すべての人からきりはなす
この暗闇を　知らない人は
まったく　おろかというべきだ

霧のなかを歩くのは　不思議なことだ
人生は孤独である
たれも　他人のことなどは知らない
みんなが　ひとりぼっちなのさ

一九〇六年、ヘッセ二十九歳のおりの作である。そのころ、彼は新進作家として一躍盛名をはせ、結婚して、ボーデン湖畔　ガイエンホーフェンという寒村に居を構えていた。放浪者ヘッセは、妻を得て定住者となった。結婚してから二年たっていた。幸福の絶頂にあると思われる詩人に、どうしてこんな詩が生まれたのであろうか。

妻には精神病のきざしがあった。三児をなした彼女とも、のちに詩人は別れねばならなかった。生活のために仕事に打ちこんでいた詩人も、自分にたいする理解者として、けっきょく、自分自身しか見いだせなかった。

だが、考えてみれば、人はみな孤独なのである。わけても自分をきびしく見つめねばならない作家や詩人は、みなそうだと言っても、差支えあるまい。

ドイツの秋や冬は深い霧にとざされる日が多い。この詩のなかには、その自然と人間の孤独が美しく織りなされている孤独という概念が、とくにドイツ文学において特異な位置をしめているのは、もっともなことだと思う。

ヘッセの父は長生きをしたが、晩年、失明した。静かな、内省的な人だったから、じっと自分の世界を守りながら、ひとりぼっちで生きていたのである。或る日、姪のモニカ、フニウスが訪ねてきた。彼女は歌手としてヨーロッパを遍歴していた。初夏のうららかな日であったので、彼女は目の不自由な詩人の父の手をひいて近所の山へ案内した。やがて、夕刻二人は家にかえった。つかれた詩人の父はベッドに休息した。彼はモニカを傍へ呼んで言った。

「息子のヘルマンが作った『孤独の歌』を

読んでくれないか」

「あの、『霧の歌』のこと？」

「うん」

彼はうなづいた。そこで、モニカは静かな口調でその詩を朗読した。読みおわってから、彼女はそっと詩人の父の顔を見た。それは、静寂と悲しみにみちていた。

彼の心は、しばしば地上に住む人間の宿命である「孤独」というものを知りぬいていた。彼は人生において、数えきれないほど、愛情にめぐりあった。いまも、家族のあたたかい愛といたわりにひたっている。にもかかわらず、彼は孤独であった。「霧の詩」を作った息子と同じように。

ヘッセは一九四六年にノーベル賞をうけ、広く世界的に読者を持った文豪であった。はた目から見れば、めぐまれた作家である。しかし、

どこにも　ふるさととてはなく
あるものは　ただ迷路と過失ばかり

と、彼は歌っている。そこに私は親しみを感ずる。ヘッセの孤独には、ポーや芥川のような凄絶さがない。人はこの世にあらわれ、やがて、みんな消えてしまう。それはさみしいが、また、一面では楽しいことでもある。

やがてまた　僕のこと君のことをも
誰一人知らなくなり語らなくなるだろう
ここには別の人らが住むだろう
僕らがいなくても　誰も惜しくも思うまい

人生の孤独というものは、所詮、人間が負わねばならぬ宿命である。このあいだ、ふと、私は横利光一が終戦後間もなく東北の農村でしるした日記の一節を読んだ。そのなかに次のような言葉がある。

「文士に憑きもののこの悲しさは、どんな山中にいようとも、どれほど人から物を貰はうとも、慰められることはさらにない。さみしさ、まさり来るばかりで、ただ日を送っているのみだ。何だか、私には突き刺っているものがある」

横光利一は昭和二十二年十二月三十日に亡くなった。私は家が近所だったので、彼が疎開から帰って、ステッキをつきながら、よく散歩している姿を見かけた。死が近かったせいか、痩せおとろえてさみしそうだった。ことに、グレイの中折れ帽子をかぶり、二重まわしを着て、遅々として歩いていた彼のいたいたしい姿が、私の目にやきついている。

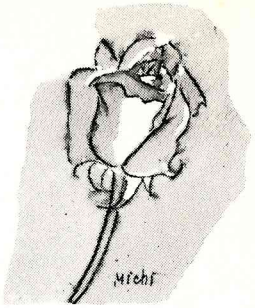
横光には、理解ふかい美しい奥さんと、二人のりっぱな男の子供があった（彼の死後、ふとした機縁から、私は彼の家族と識りあうようになった）だが、人間の孤独は、それとはおのずから別の問題である。ちょうど、あたたかいいたわりの中にありながら、じっと孤独をかみしめていたヘッセの父のように。

（教育大学教授　文博）

新年　おめでとうございます。

宇宙の大きなサイクルの起点にたって、過ぎしを省み、新しきを考える時、いつ時としてとどまらない運行の中におかれたこの身を一とき停止した状態の中において見つめるわざ、短歌の重要性を　一層につよく感じます。そして、ひとつの真実を　珠のごとくも大切に磨きあげてゆき度いと思います。

編集後記



暮の忘年会はたのしうございました。出席者三十六名になり、交換のプレゼントが品切れになり、事務長が買い整える風景などもあって、紫珠丸終航の和やかな雰囲気でした。お若い方々のコーラス清しこの夜が清らかに会場に流れ紫の珠を彫った氷の芸術を背景にして、うたい終った時、感激した船長がテーブルの上のともしびを高くかかげてよろこびを共にしました。

み子の生誕と共に　皆さまの上に祝福を捧げました。

一月号は　先づ　冒頭に　中川木鈴先生に美しい版画を製作して頂きました。お忙しいお仕事の中から、十月ごろからお心にとめて頂いて、この一月号のために彫って頂いたものです。

又　星野　田中　両教授からは〝紫珠〟にふさわしい　美しいご文章を頂きました。一九六八年門出の頁を　皆さまに豊かに飾って頂きましたことを厚く御礼申上げます。

編集室では、新らしい年を　より以上に充実したものにしたいと、新年早々研究会を開きました。この研究会は　おいおい、全員に及ぼしてゆきたい考えです。

世俗の中で成長し　世俗にまみれずに持ちつづけ磨きあげてゆく珠をひとつ抱いて、今年もまた、皆様と共に　生命の溢れる日々を過してゆき度いと思います。

今年は　苑さんの処女歌集も出版される予定ですから御期待下さい。　大伴　道子

「紫珠」規約抄

一、紫珠は紫珠同人会の発行する月刊誌です

一、歌会は毎月第三日曜日午後一時―四時
　会場　赤坂プリンスホテル

一、歌会の詠草は歌会二日前〈金曜日〉必着のこと。

一、会員は詠草五首から十首までを〆切日までにお送り下さい。

一、会員は誌代三ヵ月分納めて下さい。

一、同人は一ヵ月四百円。別口維持同人制をもうけ五百円以上を負担して頂きます。

一、入会の手続、会費納入、通信、送稿などは発行所宛お送り下さい。

一、添削希望者は、二百円封入の上詠草十首まで発行所宛お送り下さい。

一、入会ご希望の方は　直接発行所へお申込み下さい。

紫珠　1月号　第8巻第1号
昭和43年1月1日　印刷
昭和43年1月5日　発行
編集人　中市　弘
発行人　大伴　道子
印刷所　共同印刷株式会社
文京区小石川4―14―12
発行所　港区南麻布 5-2-5
大伴道子方　紫珠発行所
頒価　200円　〒6円
振替東京　100483